
けど、

水都森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けど、

【Zコード】

N1704F

【作者名】

水都森

【あらすじ】

いつもちょっと寂しい人が、読んで少しでも休憩できるような詩にしたいと思って書きました。『注記：【第1部分～第4部分】人生に関係する詩【第5部分～第6部分】恋についての詩』

#落ひ込みであるのもあつたと思ひ

LIFE

見捨てられない昨日

無意識にそれを広げてる

そんなに振り返っても

見えなかつたものは見えない

もうこいじやん?

どんなにもがいたつて無理なものは無理

そうやつてつけたメリハリが

いつか輝きにつながる

机に向かうだけじゃなくて

道に出るのも必要だよ

ねえねえ

さみしいのなくすのつて、

どうやるのか教えてよ

叱るなら

まず 心の穴埋めてからにして

future

無機質な街を歩いていく

人々の

その目はカラッポで

道端に咲く花の無邪氣さがつくる

柔らかなえくぼは

誰にでもあるはずなのに

僕らは荒波に逆らつために

心に咲く優しい花の

芽を自ら摘んでしまったんだ

くすんだ空へと伸びていく

助けてと

決して聞こえない叫び声が

雨上がりに架かる虹を見る時の

綺麗な虹の輝きは

僕にもあつたはずなのに

僕らは潮風を避けるために

田に宿る希望の力を

固く閉ざしてしまったんだ

僕らは嵐に耐えるために

未来を指す羅針盤を

海へ自ら捨ててしまつたんだ

僕らは荒波に逆らつたために

心に咲く優しい花を

芽を自ら摘んでしまつたんだ

海底

味わおうとも思えない時間をやり過ごす

薄っぺらな笑顔に囲まれる日々

もがこじつともせず

僕の心は

いつも曇つてゐるこの町に沈んでた

底の見えない暗闇に怯え

上辺に必死にしがみ付いた

いつの間にか

手は棘だけになつてた

なんで僕らはそんなにも

ヒトリボツチが怖いんだろう

誰の手も繋がずに

人は生まれてくると言ひのに

きらめく笑顔は

一体どうへ消えてしまったの?

透き通つてたあの心は

いつの間にか灰色になつてた

なんで僕らはこんなにも

綺麗なことを嫌がるんだろう

愛を受けいれる気持ちが

人には与えられているのに

正直になれない息苦しさを飲み込んだ

ここは本音の幸せ隠す海底

一筋の光が

僕の見つめる仄暗い夜空を掠めた

輪

目立っちゃいけないんでしょ？

瞳^メが言つてるもんね

「周り」が答え

真実が正答ただしいかなんて問題じゃない

みんなは”ひとり”を許さないから

”僕”を消したら ぽつかりと開いた穴

必死に無視しても

そこを吹き抜ける風は息を詰まらせる

あれ？でも笑えるよ？

何でか色のない涙も流れるけど

定規じょうぎなんていらないんじゃなかつた？

僕らしくいればいいんじゃないの？

前言撤回？そんなの聞いてないよ

無言の線 引つ張つて

「じどもだつて冷たい目してゐる

嘘だつてほんとになる

そんな世界許していいの?

いいんだよね 言つてるもんね

息苦しくてしゃがんでも

知らん振りして通り過ぎる

そしたら僕はいなんだ

それがセイカイ そうだよね?

そして 僕も「みんな」の一人

忘れちゃいないよ

さつき

うすくまり人ごみに消えてつた

小さな”僕”がいたから……

空を見上げてみるだけ、それだけ

w i n g

堪えてた

ひとりぼっちの寂しさ

最後の灯りが

風に消えた

僕の手は小さいけれど

よじれた土だつて

握り締められる

我慢した

本音本当の気持ち

一つの光りが

海にとけた

僕の声は消えそうだけど

くすんだ胸には

届くはずだから

僕の翼は脆いけど

よどんだ空だって

見上げられる

きっとしつだから

ほんとを叫びのこの勇気がいるのこの

ウソの方が綺麗に見える

前へ踏み出す足を止めないで

道は未来へ続くから

例え小さな一步でも

勇気は闇を溶かすから

やれやかな喜びだけを貰ひにして

正義の味方を信じてみるのも

たまには悪くないんじゃない?

真っ直ぐな目でい続ける」とは

二ゲルことより難しい

光輝く笑顔を消さないで

笑顔は希望へ変わるから

例え かすかな笑顔でも

希望は影を照らすから

ひとりじゃないよ

目が覚めて窓を開けた

体温で緩んだ部屋の中に

生まれたての風が流れ込んでくる

好奇心いっぱいの空気は心にも入り込む

その元氣さが冷たかつた

ねえ

ひとつじやないよ

だから手放さないで

もうひつたあの糸

無理やり握りされたものだつたかもしれないけど

離さないで

空にはもつ光が出てて

楽しそうに飛びまわる鳴き声をバックに

ちょっと今まで踏かつた雲も洗濯中

でも 混ざれないよくな氣がする

行つひやいけなこよくな氣がする

ねえ

ひとりじゃないよ

だからやめないで

気がつかないことなんかじゃないから

見てる人はいる

感じてる人はいるから

この雰囲気に爽やかに染まりたい

好きだよって叫んで

晴れた空 堂々と抱きしめたい

そんな大きい気持ち

僕じゃ抱えきれないって諦めないで

あのね

みんなが怖いんだよ

さみしいって思い込んでる

だから大丈夫

君だけじゃないから

ひとりじゃないよ

温い空気を守りたくて

すぐ閉めたくなったけど

いつの間にか冷えてた様に身震いした

ちょっとだけ換気

出かけるときはまた閉めるんだから

だから

大丈夫

何も考えないで、立ってみて、うーんと伸びしー……ヒ

たまご

夕闇に染まつた小船に

乗り込んだら足がついた

ひりひり

夜の川に行く

今は追い風はないから

三番田の星を田指す

この世界に連れ出してなんて

誰も頼んでないのに

傷がいっぱいの顔で笑えなんて

無理な話だよ

でも 暗くないわ

星は見えないことに

気づいた

生んでくれてありがとうって

今は素直に言えないけど

とつあえず この殻は破つてみる

や
ら

地面見つめるだけじゃなくて

空見あげたつていいんだよつて

当たり前のこと

肩が軽くなつた

ほり、空は何色だった？

Runner

心 鋼に染めないと

生きてユケナイけど

そんなに重くちゃ

君には飛べない

It's start spot here!

思い切って飛び立とう

君にはあるんだから 綺麗な翼が

一生懸命になると

ミンナに笑われるけど

見ているだけじゃ

汗の輝きは分からぬ

思いつ切り走り出す

君にはあるんだから 立派な足が

It's start spot here!

人生と言つ名のレースを

涼しげな顔をして

悠々と優雅に

コーナーを抜けるのか

勢いよく風を切り

生き生きと

ゴールテープを切るのか

どちらをとるかは

Runner 君次第

A r a y o f h o

この汚れきった世界の中で

ただ一人白くいて

折れそうになりながらも

綺麗な目を持ち続け

君とは不釣合いな世の中に

失望し絶望しても

希望は絶対に捨てない君は

闇に包まれたこの世界でも

優しい色に包まれて

一見脆そつに見えても

芯は人一倍強く

どんなに生き辛い世でも

冷た過ぎる歴に打たれていっても

懸命に前を向いてとする頬は

To you who shines

その光消さないで

By the light

涙溢れる世界かもしけないけど

Please wash the world

綺麗な涙で

僕の暗すざむの影さえも

君の光は

とかしてしまったのだから

手

あなたの横にだつて いるよ

隣に人がいなきや

人間の手はこんなに温かくなれない

だから今度は君が

その手の手をつかんであげる番

ほらもう冷たくなつてゐ

他の人にあげてこそ

あつたかくなるぬくもり

ちよつと元氣に生きてみよ。

e y e

大切なもので自分を塗り潰す

「それでもいいの?」

かすかに聞こえる声も

見えないフリをした

”常識”とか”教養”とか

習つ前のほうが

たくさん笑つてた氣がする

未知を怖がることだけは

変わつていなけれど

仕方ないことなんだと

思い込んでみても

あれから何だか

ちこちな瞳

真っ直ぐ見つめられないよ

守るのに必死で

探すのを急げてた

「そんなの駄目」なんて

考えもしなかった

あれこれ考えすぎて

行き止まりに追い詰めて

希望を求めるのに

喪失感に耐えられなかつた

脆い僕

現実にあわせたんだと

開き直つてみても

あれから何だか

想いもひねくれて

流れ出す涙 それさえも嘘くさい

世界なんでもの

顔はいくつもあるの

言ひ訳に 可笑しいほどにだわって

あれからだよ……

心の中の僕が

眩し過ぎて目を伏せる

弱虫になつたのは

必死な声を感じた

やつと頭を振り被る

胸のふるえは殻を破つた

これからはきっと

君の瞳も受け止められるかな？

マジシャン

ここは赤茶けた看板が立つた劇場

星の見えることが入場料

”イマ”とクラクションの一重奏の中でも

今日も列は並んでる

眩しくもないライトに包まれ

決まり文句を口にするは

見慣れない色に咳き込んだ

純粋で真っ直ぐな手品師

妥協とイチバンに塗まみれた世界で

人恋しいと嘆いてる

カタチだけの雫達を眺め

自分を縛る迷い人

そんな青白い顔しないで

今はまだ夏でしょう?

太陽を鬱陶しそうに見上げる

背伸びしたイタズラつ子

唯一綺麗だったはずの欠片は

いつの間にか染まってた

大事な（そんな）ことも氣にせぎ

彼は今日も畠の上へ立った

素直と無邪氣を守るため

彼は今日も道具を取り出した

そつ 僕のせきと弱虫

びっかで逃げてゐる

零れそつな葉っぱ達を

びつたらこいつのか分からなくて

増えすぎたものが

捨てなきゃダメでしょ

「あれも」「れも」なんて

そんな欲張りな真似 神様は許しきやくれない

潔くやめなさい

そつ 僕らに必要なのは

いつか出来る大切なものの

抱きしめるだけの言葉だけ

だたそれだけあればいい

両手を空にしたら

あの虹だって掴める

そんな気がしてきたでしょ？

ついでに弱虫からも 脱却できたみたい

あとはステキに生きるだけわ

いつか出合える

”だいじなもの”を夢見て……

火傷しそうなくらいおつきな夢

追いかけてるchallenger

わたくしれ立つた手で

もがく小鳥 無理やり閉じ込めたつて

すぐすり抜けちゃうのに

顔もわからない「みんな」に

振り回されてボロボロで

”頑張らなきゃいけない”なんて

誰が決めたの？

どんなに素っ気無く背伸びしたって

伏せる視線は隠せてないよ

喉に突つかかってる 置き忘れてきたもの

それが何か思い出せなくて

時間を氣にして焦つてゐる

終わりがいつかも知らないのに

「好き嫌いはいけない」と

小言と一緒に自分も噛み砕く

矛盾し過ぎてることを

自信満々に見せかけて話すオトナ達

「早くおいで」と明日は急かし

思い通りにはいかせてくれないけど

顔も見せない奴に

負けたくなんてないから

ねえ そうじやない?

知らない未来より　この夕日を見ていくつよ

何度も転びながら追いかけてくる

幼い僕を待つてよう

見えないことなんて　教えなくてもいい

逆に教えてもらおう

忘れてしまった　この空との遊び方を

キャンバス

安心という名の鎖を解き放ち

風が差し込む光窓

ぶつきらぼうな 太陽も

七色に染まつてゐる

晴れ空ハレシマツかもしけないから

普通のヴェールを切り開き

横道に踏み入れる

もしかしたら それは

瑞々ミズミズ（ミズミズ）しい虹に続いてゐる

小路コリかもしけないから

君の canvas

世界で唯一つきりの

大切な一枚

何色に塗つたつていい

何にも書かなくたつて

ほり もつ

廃棄ガスの音は

聞こえない

君だけの c a m v a s

だから

光に照らされ雑草^{クサ}達踏みしめ

胸張つて歩いつ

The way for my live

泥まみれになりながら

生きる意味探さなくていいよ

僕らは生きている

それだけでいいだろ

闇雲に走ってるだけじゃ

景色なんて味わえない

ゴールに辿り着く事だけが

人生の意味じゃないんだから

Let's enjoy it life

諦めない事も大切だけど

やっぱ人生は楽しまなきや駄目

強がつてばっかりじゃ

頑張つてばっかりじゃ

心から笑えないでしょ？

only one life

一度しかないとだから

好きなことしたっていいじゃん

作ってばっかりじゃ

溜めてばっかりじゃ

自分なくしちゃうよ？

行き止まつになつてから

自分の夢考えるのでも遅くはないよ

価値のない人間なんて

意味のない人生なんて

絶対に存在しないんだから

歩いてるだけで

そこには跡が残ってるんだから

あーあ、この涙は冷たいなあ……

journey

Long journey

雪のよつに夢い呪文

掴んだときには消えていて

残っているのは 冷たさだけ

頬を伝う切なさの証は

木漏れ日の川に流された

どこへ行つても逃げ場の無い

追跡者は悩める心

Long journey

水よりも燐やかな魔法^{キラ}

どうしても捕まえられない

手に取れるのは 空しさだけ

危なつかしい足取りが

見てられなかつた幼い心

夜空の涙は

待つてはくれなかつたけど

Dream journey

記憶の中に埋もれる約束

どんなに遠くなつたって

薄れでは くれなくて

Long journey

夢のように儚い呪文

掴んだときには消えていて

残っているのは 寂しさだけ

w i n t e r - s o n g

電工色に彩られた 並木道

白く染められた息は

無表情な風に飛ばされた

「明けない夜はない」なんて

ありきたりな言葉だつて

心 暖めてくれたのに

隣の席は空っぽで

霜に陰つた桜の蕾は 一人震え

脆い糸は巡りあえずに

寂しく道に迷つて消えた

「赤い糸で結ばれた」なんて

ありふれた言葉だつて

瞳 照らしてくれたのに

横には風が吹き抜けた

天まで届くツリーは 光を纏い

俯く顔をあかるく照らす

柔らかな輝きは乾いた空氣に響き

涙色にそまつた殻を

涙の窓の下 そっと脱ぎ捨てた

mind heart

雪の輝きを 私に下下さい

小さな星は 消えたけど

幼い恋火は 澄んでいて

私の手では 消せなくて

心の声を 隠せずにいた

素直なその手に 包まれない

吹雪もとかせぬ 優しい鍵は

一体誰なら 許してくれるの?

幼い笑顔は 泪を連れて

私の目では 見えなくて

真新しい白は 水に塗れた

それでも 輝き失わず

想い言葉にしても

貴方の心には伝わらない

To understand it

Without can get it over

振り返らない そう決めたのに

欠片の誓いは すっと消えた

切ない言葉は 心に響き

瞳の灯りを 止めたけど

今日も空は 笑顔に満ちて

変わらず 季節は巡つてくれ

鮮やかな花火が

絹に響いた

歪んだ水面は^{ミナモ}

二つの影を消した

貴方と繋いだ手は

風の中でも温かくて

何故だか頬に

一筋の光が伝つた

眩しい光で

素直になれない

呴く宝は

床へと落ちた

貴方と繋いだ手は

雪の中でも暖かくて

何故だか心が

切なく縮んだ

透き入る心は

冷たく氷

優しい灯りも

点せなくて

貴方と繋いだ手は

さよならを選んでて

最後の瞳は

隠せなかつた

見えない stars

不器用な太陽の瞳[×]から

灰色模様の涙

何処にも迎えられず

誰にも抱きしめられず

空しく地に落ちた

望みすぎた希望は

切なさに変わった

凍えた夜月^{ヨヅキ}に浮かぶ

硝子色の微笑み

誰にも慰められず

何処にも行き着けず

虚しく空を舞つた

淡く苦く焦れる心は

悲しみに流された

巡り逢わぬ運命の
サダメ

世界の幼い支配者達

遙かな空の中

果て無い海の上

俯き歩いていく

恋つて暖かくなる瞬間。

the center

どんなに迷つても

君の声が道しるべ

軽い翼で

飛んでゆくよ

澄んだ空を流れられらず

自由に飛べた日を

憧れ込めて眺めた

どんなに困つても

君の顔が元気薬

すぐに微笑み

取り戻すよ

一番大切なものの見つけられた

光り輝く奇跡

そつと優しく抱きしめた

どんなに悩んでも

何時でも君の心が答えだから

目を開け真っ直ぐ

見つめるよ

Happiness - colored drop

瞬きの中に閉じ込める

夢への置き土産に

私の枕はもう

すっかり涙に染まつた

私まだ 君のこと

見ているだけしか出来ないけど

想いはきっと

天まで届けてみせるから

振り構つていられない

気持ちばかりどんどん加速して

今にもはち切れそうな心を

無理やり閉じ込める

君には 私なんて

釣り合わないかもしけないけど

想いはずつと

海の底まで募つていいくから

樂しむのには主役がいない

幸せ色のドロップ

今は悲しい味しかしないけど

スペースが混じれば世界一の恋愛物

そうなること祈りながら

今日も瞳を閉じています

s k y i n g o t

広い砂漠で^{うすくま}蹲る

戸惑いの中^{うなづき}で 言葉は揺らめき

涙の海にとけていった

翼を捨てた僕の背中は

何だかとも 寂しくて

忘れたはずの想いは
新芽の香りに誘われて

舞い戻ってきた

上を見上げて田を瞑る

桜の想い 僥くて

苦くて切ない羽を身にまとつた

君の笑顔が鍵になり

希望の窓が 開いてく

カラッポな心満たされて

勇気の囁き

鞆につめた

空色の道は遠くまで

続く端は見えないけれど

二人分の席は用意してあって

手の中の 花びらを

僕はそつと握り締めた

愛

一言では表したくない

この気持ちは

簡単に済ませたくないんだ

だけど 僕のこの気持ちは

好きの気持ちの最上級

紛れもなく愛なんだ

これ以上シンプルな言葉はないけれど

これ以上温かい響きを持った言葉はないけれど

これ以上ありきたりな言葉はないけれど

これ以上心に染み入る言葉もない

この言葉でしか伝えられないのも悔しいけど

もどかしい気持ちを

どうぞ

愛します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1704f/>

けど、

2010年12月17日02時24分発行